

復興余話

# 20メートルの大津波からまさにも間髪で生還 生かされた命を町の復興に捧げる

屋上の給水タンクにしがみつく足もとまで津波が押し寄せた

東日本大震災でもっとも波乱の道歩むことになった商工会職員は、恐らく女川町商工会の経営指導員・青山貴博（40）といってもいいだろう。女川町商工会のある商工会館は海岸線のすぐそばに立ち、地上4階の高さがあった。

その建物がすっかり津波に飲まれ、逃げ遅れた青山は間一髪で難を逃れた。

地震の後あわてて会館の外に出ると、道路が60センチくらい陥没。来客や職員を脱出させた後、自分も購入したばかりの愛車を避難させようとした。しかし走り出す瞬間、道路の側溝から水が勢よく噴き出した。

「そこで車を捨てて非常階段を駆け上がりました。そこで奇跡が始まったんだと思います。あと少し走り出すのが早かったら、車ごと津波に飲み込まれていた」  
2階の事務所で大事なパソコンを抱え、3階、4階と駆け上がったが、津波は屋上にまで迫っていた。パソコンを投げ捨て、6メートルある給水塔に登り、会館に残っていた3人とともにタンクにしがみついた。足元ぎりぎりまで津波が押し寄せ、流されていく人の姿も多く見た。  
しばらくして水位が下がると、会館の4階に降りて一晩を過ごした。翌日自力で避難。自宅は奇跡的に被害がなく、家族も無事だった。しかし喜ぶのも束の間、そこから商工会職員として全力で駆け回る日々が続く。



女川町商工会が設立に力を入れたきぼうのかね商店街には約50軒の商店等が入居



女川町商工会 経営指導員  
青山貴博



青山指導員が難を逃れた女川町商工会館

とりわけ尽力したのが高台に立つ「きぼうのかね商店街」の設立だ。商工会館もあった女川町の中心には6つの商店街があり、約170軒の商店があった。それらがすべて津波で流失。安全な場所にいち早く新たな商店街を形成することが求められた。適した用地はなかなか見つからなかった。そんなとき女川高校のサブグラウンドに建設予定だった仮設住宅が、震災翌月の大きな余震で頓挫。当時は地元選出の県議会議員だった須田善

明さん（現・女川町長）に県へ掛け合ってもらい、6月には商店街の用地として借りるOKをもらった。

その後も紆余曲折はあったが、イギリスの救世軍が木造店舗30軒の建設資金提供を決定。それを受けて鎌倉の一般社団法人パッシブハウス・ジャパンが復興のシンボルとなるような商店街を設計。建材はアメリカ、木材は宮崎県から届き、それを地元の大工さんが最優先で施工してくれた。国の支援でプレハブも追加され、商店50軒と銀行・郵便局からなる商店街が完成した。昨年4月29日にオープンし、商工会の事務所もそこに置かれている。

商店街の設立とともに、軽トラによる移動店舗支援にも携わり、3台をスパーのおんまえやと鮮魚店のおかせい、そしてきぼうのかね商店街に割り当てている。

### 明るい雰囲気のお店街を設立 ここからの復興をめざす

「女川町の人口は1万人を超えていましたが、震災で1割弱が犠牲になっています。さらに仕事や住宅を求めて仙台や石巻へ出てしまった人がいるので、恐らく6000人台まで減っているはず。いままではこれ以上の人口流出を防ぐため、商店街や移動販売を整えてきました。これからは市街地を復興させ、人呼び戻すのが仕事です」

そのため行政の復興会議にも参加し、街区の形成などを考えている。商店主など民間には行政にないアイデアもあるので、それを代弁しているという。

「外へ出ていった人が住み戻る、そして住み残る、さらにはボランティアなどで縁ができた人が住み来る、女川をそんな町にしたいと考えています」



幸い水産業は立ち直りが早く、市場も仮設で復旧。カターの支援で大型の冷凍・冷蔵施設も誕生した。水産加工場も2〜3年で復興するとみられている。女川は水産業が復活しないと雇用や定住が生まれず、商業も回っていかない。さらには水産と並ぶ産業だった観光も、震災前のような日帰り中心ではなく、滞在型を提案できるようにしたいと青山は熱く語る。

「私は石巻出身ですが、妻が女川の生まれで、マイホームもここに建てました。その女川に転職してからちょうど1年で震災に遭いました。女川であのピンチから生かされたのは、このために働けという啓示かもしれません」

5年後、あるいは10年後、いまは更地が広がる女川の中心街に、青山が描く暮らしやすい町が実現していることだろう。